プロジェクト研究：冠動脈閉塞例の不整脈

馬場國蔵、浅井利夫、神谷哲郎、加藤裕久、清沢伸幸、
薗部友良、関一郎、長嶋正実、中野博行、馬場清、原田研介

要約：γ－グロブリン療法が施行されるようになった現在、川崎病の冠動脈有病変児、特に、その冠動脈閉塞性病変を残す例は少なくなってゆくので、過去の例（学童例）のホルター心電図所見を中心に検討し、不整脈が本症既往児の長期予後にどうからむかを検討するプロジェクトを考えた。本年度はそのパイロットスタディーとして33例の学童例の検討を行った。今回の結果はネガティヴであったが、そのデータをもとに次年度の本研究のアンケート調査表の作製をはかった。次年度に最終的報告を行う予定である。

見出し語：川崎病遠隔期、冠動脈閉塞性病変、不整脈、ホルター心電図

学校管理下における心臓性突然死の60％はいわゆる原因不明の急性心不全とか心停止といわれるものである。その大半は不整脈がらみの突然死と考えられる。原因の明らかな心臓性突然死は1／3であるが、第1に多いのが特発性心筋症、ついで器質的心疾患、不整脈、心疾患術後、冠動脈疾患、川崎病既往児とつづくが、これらの死亡にも不整脈が直接的に関与している率は非常に高いと推測される。

そこで、川崎病の遠隔期予後に病的な不整脈がどうからんでくるかを検討しておくことも大事になってくる。２年前に東邦大の直江教授が恐らくはVTとおもわれる発作を何回も起こした上で死亡した例を報告された。はしたなくも、たいした経験もなく川崎病の長期予後に病的不整脈がからむのではないかと考え、本小研究グループをつくった次第である。まず、本研究について、どう行って行くかのパイロットスタディーをホルター心電図結果を中心に行った。これまで川崎病既往児の不整脈について諸家の報告があるが、筆者がチェックしえたところでは、そのほとんどは急性期のもので、既往遠隔期におよぶものは横浜市大の報告に１部ふくまれているに過ぎません。

今回は、筆者が管理している学齢期に達した閉塞性冠動脈病変をもつ33例について検討した。その症例の内容は本症罹患年齢が２歳３ヵ月±２歳

神戸中央市民病院、東京女子医大第２病院、国立循環器病センター、久留米大学医学部京都第２日赤病院、日赤医療センター、墨東病院、名古屋大学医学部、県立静岡こども病院、倉敷中央病院、日本大学医学部

7ヵ月で、全例発症後5年以上たち、平均11年4ヵ月±3年6ヵ月である。33例の閉塞性病変については図1に完全閉塞の、図2に狭窄性病変の状況をしめした。

31／33例にトレッドミル運動負荷心電図検査をおこなったが、有意な不整脈の誘発は認められなかった。

25例にトレッドミル負荷タリウム心筋シンチスペクトグラムを行なった。22／25例、88％に何らかのアイソトープのとりこみ低下がみられた。しかしこの負荷時の虚血反応と不整脈発生との関係は今回は認められなかった。

ホルター心電図は31例で施行したが（表1)、ここに示したように最大限、2連発の心室性期外収縮を1コみるのみで、とても病的不整脈があるとはいえなかった。しかし、今回の31例の検討は7歳4ヵ月から21歳9ヵ月までのものであり、本当の意味での超遠隔期とはいえない。来年以後には全国各地の症例を検討してゆきたい。

今回の報告で研究協力者各位の助言で調査表の作製ができる予定で現在その作業を進行中である。

図1

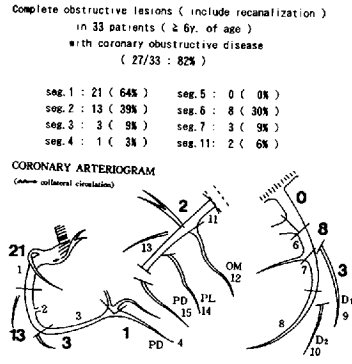

図2

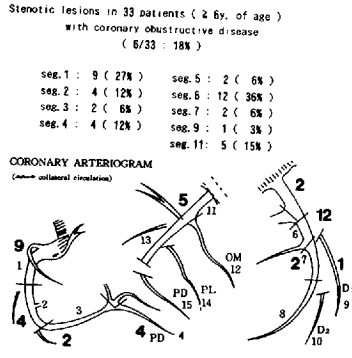

表1　学齢期に達した閉塞性冠動脈病変をもつ既往児（33例）

最終ホルター年齢(31)	7歳4ヵ月～21歳9ヵ月	12歳7ヵ月±3歳10ヵ月
最終ホルター後（31)	5年3ヵ月～15年3ヵ月	10年4ヵ月±3年3ヵ月

ホルターECG上の不整脈
散発性心室性期外収縮（＜10コ／日）；6　　心室性期外収縮2連発；1
ヴエンケバッハサイクル；3　　散発性心房性期外収縮；3

最終トレッドミル(31)	5歳9ヵ月～21歳4ヵ月	12歳2ヵ月±3歳10ヵ月
最終トレッドミル後	1年6ヵ月～15年3ヵ月	9年10ヵ月±3年7ヵ月

トレッドミルECG上の不整脈
準最大運動時の心室性期外収縮（2コ）；1
運動負荷後の散発性心室性期外収縮；1
運動負荷後の散発性心房性期外収縮；1

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約: γ-グロブリン療法が施行されるようになった現在、川崎病の冠動脈有病変児、特に、その冠動脈閉塞性病変を残す例は少なくなってゆくので、過去の例(学童例)のホルター心電図所見を中心に検討し、不整脈が本症既往児の長期予後にどうからむかを検討するプロジェクトを考えた。本年度はそのパイロットスタディーとして33例の学童例の検討を行った。今回の結果はネガティヴであったが、そのデータをもとに次年度の本研究のアンケート調査表の作製をはかった。次年度に最終的報告を行う予定である。